

川あかり

能村 研三

いのちの理由

先日、市川市文化会館で行われたさだまさしさんのコンサートを聞きに行った。さだまさしさんは、俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進に向けて、俳句を愛する一人として応援メッセージを寄せていただいたご縁で、何回かコンサートに行かせてもらっている。

さだまさしさんは、長崎から上京され小学生の時から市川に住まわれた。市川を故郷のように親しまれ、ほぼ毎年、コンサートを開かれている。十数年前、私が文化会館の館長であった頃にも何度もお会いしたが、今回も直接ご挨拶出来た。

折々にはさむトクも絶妙で、市川の新田に住んでおられた頃の話題などは私には身近に感じる事が出来た。

今回はアーティスト活動50周年記念ということで、お馴染みの、「精霊流し」「無縁坂」から始まったが、

この町の祭 濟みたる川あかり
しんがりの雲退けて梅雨上る
熱きもの食べて暑き日終りけり
真清水の掌上に切る豆腐かな

足組むはさびしき形 晩夏光
ひと仕事遅れし田あり稲の花

爽節や江戸川越えて変る風
遠きほど思ひ深まる花火かな

口惜しきことや白桃かぶりつく

耳打ちの大きすぎたる生身魂

フィナーレ近くの「風に立つライオン」あたりはことに盛り上がった。中でも、浄土宗法然上人の八百人大遠忌を記念して制作された「いのちの理由」という曲に心打たれるものがあつた。

「私が生まれてきた訳は父と母とに出会うため 私が生まれてきた訳はきょうだいたちに出会うため 私が生まれてきた訳は友達みんなに出会うため 私が生まれてきた訳は愛しいあなたに出会うため」という歌詞で、さらには「私が生まれてきた訳は何処かの誰かを傷つけて 私が生まれてきた訳は何処かの誰かに傷ついて 私が生まれてきた訳は何処かの誰かに救われて 私が生まれてきた訳は何処かの誰かを救うため」と、単なる綺麗ごとだけでは終わらない人間関係が歌われていて、私とほぼ同年代のさだまさしさんの考え方に感動させられた。

能村 研三

(「俳壇」掲載句)